

## 西欧女性の手仕事モラルと明治日本におけるその受容

前野 みち子  
香川 由紀子

### はじめに

ヨーロッパ世界において、手仕事に女性のモラル（いわゆる婦徳）を見出しあるいは表象する傾向はいつ頃から生じたのだろうか。手仕事はもちろんごく最近まで、実際に女性の日常労働の一部、あるいはかなりの部分を占める重要な要素であった。本稿では、この手仕事モラルがヨーロッパ世界でどのように形成され、どのような歴史的展開を辿ったのか、そして近代まで重要なモラルを担っていた西欧の女性の手仕事近代化（開化＝西欧化）をめぐり明治日本に輸入されたとき、従来の日本的・儒教的な手仕事モラルとどのように交わりどのような影響を及ぼしたのか、について概観したい。

### (一) 古代ギリシアにおける〈糸紡ぎ〉と〈機織り〉

ヨーロッパでは近世まで、女性の美徳を象徴する手仕事として〈糸紡ぎ〉が繰り返して説かれ奨励された。十九世紀半ばに採録されたグリム童話にも〈糸紡ぎ〉に関する話は数多い。古くヨーロッパ文化の起源を遡ってみるならば、〈糸紡ぎ〉はすでにギリシア神話の時代から女性の手仕事の典型と見なされ、その先の工程である〈機織り〉についても随所に言及が見出せる。この古い時代に、女性の手仕事は一体何を意味していたのだろうか。

ヘシオドスの『神統紀』（前七〇〇年頃）は、三人の運命の女神<sup>モイライ</sup>たちの名として最初にクロトー（紡ぎ女）を挙げ、ホメーロス（前八世紀後半）は主にただ一人の運命の女神<sup>モイライ</sup>をやはり「紡ぎ女」として物語っている。麻糸や羊毛糸を撚り紡ぐ作業に携わる者にとって、またそれを日々目にする者にとつ

て、時には不意に短く途切れ、時には思いのほか長く撚り上げられる紡ぎ糸の偶然性は、人の命の長短の同様に予測しがたい偶然性と重なって見えたに違いない。

運命を司る神を「紡ぎ女」とする観念連合は、〈糸紡ぎ〉が古代ギリシア世界でごくありふれた女性の手仕事であったことを暗示している。そしておそらくはこの作業の屋内性と単純さが、〈糸紡ぎ〉を娘（処女）と結びつけて表象する伝統をも生んだのだろう。たとえば、あの狡猾なシーシユポスによって誘拐され、「謀計にゆたかな」オデュッセウスの母となる大泥棒アウトリュコススの娘アンテイクレイアは、早くから糸巻棒を持った姿で壺絵に登場している<sup>三〇</sup>。ここでの糸巻棒は、家内の奥まった部屋でひっそりと手仕事に勤しむ処女の属性となっている。また、ギリシア神話のなかでも特によく知られる〈アリアドネーの糸〉のエピソードでも、古い壺絵によれば、迷宮から無事に戻って来られるようにテーセウスに贈られた糸は、「さわめて清い女（処女）」アリアドネーがちょうど紡いでいた撚り糸（あるいはそれが巻きつけられた紡錘か糸玉）だった<sup>四</sup>。

ホメーロスが語るオデュッセウスの妻ペーネロペイアの物語では、周知のように〈機織り〉が大きな役割を果たしている。しかし〈糸紡ぎ〉もまた彼女の日々の仕事であったことは、息子のテーレマコスが広間に現れた母親を諫めて語る「……奥へ引き取られ、

御自分の受持つ仕事をなさいましょう。機を織るなり糸を繰るなり。侍女たちへも仕事に精を出すよう指図なさって下さい。」<sup>五</sup>という言葉から明らかである。

あるいはスケリエー島の王女ナウシカアが見知らぬ人オデュッセウスの苦境を忖度し自分の母親に援助を求めよう勤める際にも、その母は次のように描き出される。「母はおそらく炉のわきに、火に照らされて坐っていましたよう、大柱に倚り懸かたまま、潮紫の毛糸を糸巻き俥に繰り取りながら。」その傍らには父アルキノオスの台座が据えられ、「その上に父が座ってお酒をあがるご様子は、不死の神にもたぐえられ」る（同、第六書、三〇五〜三〇九行）。この古き良き時代の賢明な王とその妃の姿は、古代ギリシア人にとっての夫婦の理想像であり、不本意ながら自国に帰り着けないでいるオデュッセウス自身の館の混乱と鋭い対照をなしている。仲むつまじく並ぶ王の夫妻の平和な日常。まさしくその場面で、王が機嫌良く酒をのむ一方、王妃は糸を繰る手を一時も休めていない。ポリス男性社会のイデオロギイ的美徳、すなわち広場における〈大きな言葉〉（演説）と戦場における〈大きな行為〉（武勳）は、ともに屋外で発現する能力であり<sup>六</sup>、他方女性に唯一ふさわしい場と見なされた屋内は家政の支配する場として、家産の増大をめざすノモスが屋内に属する人々（女性と家事奴隷）に日々休まぬ労働を要求していた。

〈機織り〉もまた、屋内の女性の手仕事として〈糸紡ぎ〉と変わらぬ側面を持っているが、古代ギリシア人は機織りのための「とりわけ美ごとな手先の技とすぐれた知恵と」を「アテーネー女神が彼らにお授けなさった」（同、第七書、一〇五―一一一行）能力と見なしていた。単純な〈糸紡ぎ〉に比して、〈機織り〉はその知的要素が強調されたのである。

そしてもちろん、二十年にわたる夫の不在中孤閨を守った貞潔なペーネロペイアが、乱暴狼藉をはたらいて結婚を迫る求婚者たちに返事を留保する言い訳としたのもこの〈機織り〉だった。ようやくイタケーに帰り着き、館の様子を探るために正体を隠して訪れたオデュッセウスに向かい、彼女はこう語って聞かせる。「……私も詭計をめぐらしたもので、まず手始めには、広幅布を織る考を、神が私に吹き込みなさり」、「……この広布を織りおえるまで」待つてほしいと求婚者たちに訴えて、昼間はそれを織り続け、夜ごとにほどこいて三年の間彼らの「眼を昏ませ納得させ」た、と。ここでも〈機織り〉は「思慮深い」ペーネロペイアの知恵（詭計）を象徴する手仕事となっている。

ギリシア神話には更にもう一つよく知られた〈機織り〉に関する物語がある。トラキアの蛮王テレーウスがアテーナイ王の娘である妻プロクネーの妹ピロメレーを凌辱し、彼女がそれを口外しないように舌を切つて森に置き去りにしたというあの残酷な話

である。ピロメレーは〈機織り〉に長けていたので、この受難を描いた一枚の布を織り、それを姉に送つて不幸な出来事を伝えた。この話がローマ時代に至つて、布に織り込まれた絵を文字とする再話<sup>7</sup>を生んだのは、〈機織り〉を知恵の賜物と見なすギリシア的文脈を受け継ぎ押し進めた結果と考えることができるだろう。

しかしこのように古い起源をもつ神話や叙事詩での数々の言及にもかかわらず、古代ギリシア社会において女性の手仕事が婦徳（処女性や貞潔）のモラルを担う寓意的表象として流布した形跡はほとんど見あたらない。早くから労働を奴隷に委ねて男性市民が政治と戦闘の専門集団と化した古代ギリシア社会は、屋内に属する女性とその労働について屋外（＝広場<sup>アゴラ</sup>）で語り称賛する必要をまったく認めなかった<sup>8</sup>。ペーネロペイアは手仕事によってではなく、二十年間婚約者を却け孤閨を守つたその屋内的な思慮と知恵によって、あくまで物語のなかで語り継がれたのである。

## （二）古代ローマの〈糸紡ぎ〉と家政イデオロギー

ところが、古代ローマでは既にこの都市の建設神話のなかに、〈糸紡ぎ〉を妻の携わるべき仕事として、しかも唯一の、仕事として象徴化する注目すべき言説がある。それはローマ期のギリシア人著作家プルタルコスが伝えるサビーニー女の掠奪の話に含まれ

ている。ローマを建設した初代の王ロームルスは、深刻な人口不足を解消するために近隣のサビーニー族を祭りにおびき寄せ、その女たち（主に処女たち）を掠奪した<sup>九</sup>。彼女たちが強制的にローマ人の妻にされ、子供を産み、夫と平穏な生活を送り始めた頃、サビーニー族はかつての掠奪に対する復讐を遂げるためにローマとの戦争を開始した。闘いが膠着状態に陥り、また新たに始まるうとしたとき、「前に掠奪されたサビーニー族の娘たちが叫び聲聞の聲を揚げて方々から現れ、神に憑かれた人のように武器や屍體の間を縫つて自分たちの夫や父のところへ駆け寄り、或るものは幼児を腕に抱へ、或るものは解けた髪を顔の前に振り亂し、孰れも情愛の籠った呼名で或ひはサビーニー族或ひはローマ人に呼びかけた」<sup>一〇</sup>。彼女たちの捨て身の行動と説得はついに両者の間に和平をもたらし、サビーニー族はローマの町に共に住んで共同の統治を行うことに合意した。そしてこの時「婦女についての取極めが成立し、夫のために毛糸紡ぎ以外の仕事はしないといふことになつた」<sup>一一</sup>（同、一五）という。

この神話は、ローマの軍団が戦争で手に入れた土地に都市を建設し、その地の女たちを娶り、土地所有農民として土着化することをめざした人々であったという歴史的事実<sup>一二</sup>を色濃く反映している。そして同時にまた、そのような事業を成し遂げ個々の家政の繁栄を企図する上で、土地の女たちの意を迎えその協力を得

ることがいかに重要と考えられたかについても証言している。プルタルコスは一ターナイを創建したとされるテーセウスの女性関係と比較して、ロームルスが自身範を示すことによつてローマ市民たちの結婚生活に「相互の尊敬と愛情と信頼」をもたらしたと評価している（同、〈比較〉六）が、妻たちには〈糸紡ぎ〉のみが課されるという建国神話中の夫婦協定は、その裏面に嫡子を産み育て、家政において重要な役割を担う妻に対する多分にイデオロギー的な配慮が含まれていたと思われる。

従つてローマ女性たちの妻としての貢献は、ギリシアとは異なり、男たちによつて大いに讃えられるべきものと考えられていた。サビーニー女たちの捨て身の行動が戦場（公的な場）の男たちに和平をもたらしたという神話は、たとえ間接的にもせよ、男性の行為の場に女性が関与し貢献しようという注目すべき考え方を示している。それはまた、女性の貢献に公的讃辞を贈る伝統さえも生み出した<sup>一三</sup>。つまりローマ人にとつての〈糸紡ぎ〉は、単に屋内の女性の手仕事を代表するものではなく、男性の公的領域に寄与する女性の力、私的領域にあつて陰に陽に公的領域を支える妻・母たる女性の力へのイデオロギー的評価・尊重を内包し、モラルと合体した表象だったのである。

(三) キリスト教中世の〈糸紡ぎ〉と〈機織り〉

それではこのようなローマ的伝統は、キリスト教中世の〈糸紡ぎ〉の表象にどのように流れ込んでいったのだろうか。

たとえば十二世紀前半に、スコラ哲学者アベラールとの恋で知られるパリの才媛エロイーズは、自身が結婚した場合の生活を想像して、「学生が居ると思えば侍女が居り、机があると思えば揺籃があり、本や黒板があると思えば紡ぎ棒があり、筆やペンがあると思えば紡錘がある」(傍点筆者)という混乱した状態を憂えたという。この記述は、不幸な事件の後しばらく消息を絶ったアベラールがある友人に宛てて自身の半生を物語った手紙(第一書簡)に見られるものだが、その背後にはパリの市井に生きる若い妻の日常が窺われる。だからこそそれはエロイーズが結婚を拒絶した第一の理由でもあった。彼女は神の嘉する「神聖」で「健全な「妻」という存在の属性、すなわち結婚した女性の日常生活に付きものの「揺籃」「紡ぎ棒」「紡錘」を桎梏と感じたのである。

ところで、ここに言及される子育てと〈糸紡ぎ〉は、何よりもまず生活の必要を満たすための日常的行為だった。それはたしかに、楽園から追放されたイヴの末裔に課された女性労働の典型としてキリスト教モラルを加味されていたが、家族基盤を重んじるローマ的な家政イデオロギーと異なり、それを妻の義務(あるいはそれと引き替えの権利)として宗教・社会制度が積極的に喧伝

した形跡はあまり見られない。

〈糸紡ぎ〉の単純さは古来、女性の自然(本性)に基づく単純さ・受動性の觀念とも固く結びついていてきた。それは実際、若い娘から老女までほとんどあらゆる年齢段階の女性が日常的に従事可能な作業であり、その意味でキリスト教的勤労モラルと現実の生活を無理なく結び付けうる表象だった。しかしそれが若い娘たちに説かれる場合には、少し違った側面が強調されることになる。中世後期から末期にかけて、娘たちの教育に触れた資料は必ずと言ってよいほど〈糸紡ぎ〉や針仕事などの手仕事について言及していた。それによって娘はよく「聞き、決して考えない」<sup>三</sup>従順な性格を養い、外の危険(色恋沙汰)を免れることができる<sup>四</sup>と考えられたのである。あるいは、理解力と理性を欠いた娘一般にとって手仕事は本性に適った楽しみともなり、外を歩き回ったり悪徳を身に付けたりする暇を与えずに済むというその抑止的効果も期待された<sup>四</sup>。このように手仕事は単なる生活の必要と結びついた勤労モラルを意味するだけでなく、娘が従順と服従を学び悪徳を遠ざける手段とも見なされたが、これもまた特にキリスト教的文脈で語られたわけではなく、古来良家の娘たちに向けて説かれてきたモラルを教会がサポートしたと見るべきだろう。

娘たち、ひいては女たち一般の手仕事に託された従順・服従のモラルは、同じ文脈で寡黙さ(おしゃべりの戒め)を要求してい

た。しかし現実の女性の手仕事はと言えば、ホメーロスの昔から集団で行われることも多かった。家政を重んじたローマでもその事情は変わらない。従って、手仕事の場合はかなりにぎやかなものでもありえた。十二世紀北フランスの貴族の娘たちが針仕事の集まりで歌ったとされる〈お針歌〉<sup>一五</sup>も、この優雅に洗練された場が常におしゃべりともにあつたことを窺わせる。同じく宮廷婦人たちが集って手仕事に勤しむ姿を描いた初期ルネサンスのフレスコ画からも、上品なおしゃべりのさざめきが聞こえてくる<sup>一六</sup>。都市に生きる市民女性たちが手仕事に勤しむ日常的な場も、中世末から十六世紀にかけての木版画がしばしば示しているように常に使用人や子供たちと共にあり、まさしくエロイーズの言葉どおり、侍女（使用人）と揺籃と紡ぎ棒と紡錘が雑然と入りまじる空間だった。農村部で農閑期に設けられた〈紡ぎ部屋〉の慣習は、その騒がしく粗野な雰囲気知られていたし、都市で行われた持ち回りの小さな〈紡ぎ部屋〉も口さがない女たちの噂話<sup>ゴシップ</sup>の場として民衆文学に登場している<sup>一七</sup>。それにもかかわらず、手仕事が寡黙さを生むとする言説は長い間女子教育を論ずる男性たちの固定観念をなしていた<sup>一八</sup>。そしていずれにしても、中世を通して人すべて、（の代表としての男性）に対するモラルを説き続けたキリスト教は、世俗の女性たちに焦点を当てた教化にはまださほど大きな関心を払っていなかったように見える。

中世キリスト教が目にしたのはむしろ、世俗を去った女性、つまり修道女や聖女たちだった。そのなかに、後世にしばしば〈糸紡ぎ〉と結びついて想起された聖女エリザベトがいる。ウオラギネの『黄金伝説』（一二六七年頃）<sup>一九</sup>が語るハンガリー王の娘エリザベトは「幼少のころから質素な生活を愛し」、「虚飾のあそびごとを避け」、結婚して方伯夫人となってからも妻としての本分に恃ることなく信仰に帰依した。夫の死後は修道女となって貧民のための施療院を設立し、自ら病人の世話をし、様々の試練・苦難に耐えて多くの奇蹟を行ったという。ここでは宮廷的虚飾と対照的なエリザベトの清貧生活が強調され、自ら糸を紡ぎ布を織って貧者に与えた挿話<sup>エピソード</sup>が象徴的に物語られる。彼女の〈機織り〉が生み出すのはもちろんアテーネーの知恵を駆使した美しい布ではなく、日用に供する質素な粗布である。貧者と病人の救済は中世的聖性の典型的な発現形態と言えるが、それは女性の最も卑近な手仕事に媒介されることによって、長くこの聖女の民衆的な人気を支えることになった。中世キリスト教の女性に対する勤労モラルがこのような聖女像に凝縮して示されるに止まったのは、生活の必要が女性の手仕事を当然視させていただけでなく、時代全体がまだ〈時は金なり〉の思想に追い立てられてはいなかったためだろう。中世は無気力や怠惰から乞食をする人々に対してはまだ十分に寛大だった。

(四) 近世から近代へ

十六世紀に至っても、〈糸紡ぎ〉は相変わらず女性たちの典型的な家内労働だった。この世紀の前半に糸車が出現して作業能率は格段に上がったが、この新式の器械はまだかなり高価で、相変わらず糸巻き棒と紡錘による旧式の〈糸紡ぎ〉に従事する女性たちが多かった。しかし乞食が単なる慈善的救済の対象ではなくなり、都市（と教会）が設立した自力更生施設に収容されたり労働を強制されたりするようになる十五世紀半ば頃から、近世・近代につながる勤労モラルが徐々に浸透し始める。そしてほぼこのあたりから、説教者による〈虚飾〉<sup>ヴァニタス</sup>の戒めが商業都市で急速に調子<sup>トーン</sup>を強めていくのである。

〈死の舞踏〉<sup>ダンス・マカブレ</sup>のメッセージとも重なる〈虚飾〉<sup>ヴァニタス</sup>の戒めは、中世末にいくつかの寓意表象に結晶した。男性に向けては主として髑髏<sup>スケレトン</sup>が二〇、女性に向けては鏡を手にした着飾る女性や蠱惑的な若い女性と醜い老女の対比が〈虚飾〉<sup>ヴァニタス</sup>を意味する図像になった。しかしその一方で、衣服や装身具への執着という旧来のネガティブな女性観は、十六世紀になるとそのアンチテーゼとして〈貞潔〉の称揚・教化の言説を生みだし、この善悪対をなすイメージが次第に新教的イデオロギーの色彩を帯びて、女性に関する二つの寓意的思想を形成していくことになる。

ルネサンス・人文主義が甦らせた〈貞潔〉の代表は古代ローマ

史に語られるルクレティアである。十六・七世紀の画家たちはその凌辱や自害の場面を繰り返し描き、詩人たちはこの悲劇を素材に様々な作品を創作した。ところがこの話を女性向けに語る北ヨーロッパの書物や図像ではその前史、深窓に暮らす彼女が侍女たちと糸紡ぎをしながら戦場にある夫を思い涙を流す場面二の方に焦点を当てている。日常性を重んじるこの地域の心性は、女性たちにルクレティアの劇的貞潔さをではなく、〈糸紡ぎ〉が示す家庭的・屋内的な貞潔さを推奨した。つまり〈糸紡ぎ〉は単純な勤労モラルを暗示するだけでなく、〈貞潔〉という意味ラベルを貼られた寓意的行為として大々的に流布し始めるのである。この寓意化を示す初期の例、アムステルダム市収入役の妻アンナ・コッデの肖像画（一五二九年）は、この若い妻を大きな最新式糸車を操る〈糸紡ぎ〉姿で描き出すことにより、彼女の何不自由ない階層への帰属とともに、にもかかわらず〈虚飾〉<sup>ヴァニタス</sup>に陥ることのない家庭的堅実さ、〈貞潔〉さを前面に押し出している三〇。その一方で、旧来の糸巻き棒は、十六世紀前半に生まれた〈女性の人生段階図〉でしばしば「七十歳」あるいは「八十歳」の属性をなし、人生の役割から退いた女性の神の意志に適った生き方、「質素」「儉約」「敬虔」を表す寓意になっている。

〈糸紡ぎ〉に付された後者の寓意は、勤労と儉約による蓄財が魂の救済につながると説くカルヴァン主義イデオログが十七世

紀前半のオランダで積極的に活用したものであった。たとえばフィスヘルの寓意画像集<sup>三三</sup>の一葉は、糸巻き棒と紡錘の画像に「収入に合った生活」と題して次のような教訓を述べている。「自分の財産や収入以下の生活をする者は常に富み、快活で大いに満ち足りているものだ。糸紡ぎでも生計が得られるとは実に何と質素なものではないか。」彼はまだ旧式の紡ぎ具を描いてその質実さを強調しているが、当時すでに一般化していた糸車は、この世紀を通じて風俗画や銅版画に繰り返し登場した寓意的小道具だった。それはしばしば老女の傍に描かれ、あるいは家庭的「貞潔」の寓意として主婦の傍に、そして時には若い娘の傍にも置かれた。しかし儉約と質実を説くカルヴァン主義が後退し、都市生活が豊かさを増すにつれて、〈糸紡ぎ〉は急速に市民女性にとつての現実性を失い、風俗画には縫い物をする主婦の姿も目立つようになる。

娘たちに対しても手仕事をめぐるモラルは説かれ続けた。いやむしろ、説教し訓戒をほどこす調子は十七世紀初頭から一段と強まり、女子教育への社会全体の関心が如実に感じ取られるようになっていた。しかしこの時代の娘たちに「従順」「勤勉」「純潔」の美德<sup>モラル</sup>を教える手段として説かれた手仕事は、より高度な技術、つまりアテーナーの知恵を必要とする、それゆえ彼女たちの属する階層を示唆することにもなる縫い物、レース編み、刺繍など

で<sup>三四</sup>、単純な糸紡ぎはかつての中心的な位置から周辺に退いていた。これらの手芸は、富裕層や中産層の娘向けに需要が高まりつつあった女学校教育でも重視され、この時代の肖像画も娘たちをしばしば縫い物やレース編みをする姿で描いている<sup>三五</sup>。

このような手仕事の手芸化と軌を一にして、その寓意的意味も複雑化していく。すでに述べたように、娘たちに手仕事が勧められた背景には、それによって男性の誘惑を却けることができるという伝統的な言説があり、それはもっぱら女性の手仕事の屋内的性格に依拠するものだった。多くの神話的挿話<sup>モソッド</sup>が語るように、手仕事をする処女の「純潔」と妻の「貞潔」は元来この屋内性、男性が外から足を踏み入れることができない物理的距離と緊密に結びついていた。中世都市において、手仕事にまつわるモラルが深窓暮しの叶わぬ一般市民の娘たちに向かつても説かれえたのは、やはり屋内での「勤勉」(集中)が外の誘惑を遠ざけると考えられたからである。ところが十七世紀オランダの風俗画では、これまで外と内の間に存在していた垣根がある程度まで取り払われて、手仕事をする若い娘たちにもしばしば男性が近付いている。風俗画は当時の現実をありのままに描写したものとはいえないが、娘たちは今や男性が近付いたり求愛したりできる所にいると考えられるようになっていた。この新しい状況に即して、娘たちと手仕事をめぐる風俗画の主題は次のようなくつかの意味

方向をめざして構想される。一つは旧来のモラルの延長線上にあり、屋内で一人手仕事に勤しむ娘を描くことによって彼女の自発的な「純潔」の保持を示唆するもの。もう一つは、手仕事に勤しむ娘が近付いてきた男性の（時には金貨による）誘惑に曝される姿を描くもの。ここではもちろん、手仕事でつましい生活費を稼ぐ娘が「純潔」（処女性）を保持して自発的に誘惑を却けるよう要請されている<sup>二六</sup>。この画題は後により洗練された文脈にも敷衍され、近付いてくる男性の求愛を求婚に導くために（つれない態度<sup>ベトラルキズム</sup>）で手仕事への没頭を装う娘の姿も描かれた（この場合も娘たちは自発的に「純潔」を保持していることになる）。そして最後に、集中の途切れた手仕事、つまり娘たちが手仕事を膝に載せたまま、あるいは脇に置いたまま恋の思いに気を取られている様子を描くもの<sup>二七</sup>。手仕事の中断はそのままモラルの中断を意味する。当時若い人々を熱中させていた恋の力はこうして伝統的な手仕事モラルに真っ向から挑戦し、娘たちが対立する力<sup>アモル</sup>の間で葛藤し試練に立たされるといふ近代小説的な設定<sup>シチュエーション</sup>の萌芽がここに初めて登場するのである。

### （五）針とペン（手仕事と書くこと）

十八世紀になると糸車はすっかり農村部に追いやられ、都市の娘たちに教えられる手仕事は実用的な縫い物や上品な手芸が一般

的になった。縫い物は貧しい娘たちにとっても糸紡ぎより有利な技術だった。孤児になったモル・フランダーズは市の委託で預けられた善良な婦人から縫い物を習い、十二にもならないうちから上手に細工ものを作り、針仕事で自分の生活を賄うことができたということになって<sup>二八</sup>。リチャードソン描くところの田舎教師の娘パミラも、亡くなったお屋敷の奥様に教えられて針仕事の万端を身に付けた小間使いであり、日常的な衣類一式の仕立てから装飾的な縫い取りまですべて上手にこなすことができた。そして、彼女を追い回す新しい御主人ミスターBから逃れて田舎に帰ろうと決心する際には、生計の手段としてこの針仕事の内職を夢想している<sup>二九</sup>。十七世紀のピカレスク・ロマンの系統を引く奔放な性格のモルとは異なり、パミラはミスターBの金銭による、甘言による、そして挙げ句の果てに実力行使に及ばんとする誘惑に対して、オランダ風俗画のように、手仕事の寓意である「純潔」を死守しようとする。彼女の「純潔」はもう一つの手仕事、つまり手紙を書くという手仕事（テクスト<sup>二〇</sup>（機織り）の産物）によっても支えられている。この奇妙な娘は、危機に曝され続ける状況を細々と両親に報告する手紙を書き続ける。このテクストを織り続ける行為が自身の「純潔」についての反省を促し、状況認識を深め、その結果として彼女の「純潔」が保全されることになるのである。この構図は風俗画のモラルの見事な小説化とも言えるだ

ろう。

さらに同じ作家が造型したピューリタン精神の化身クラリッサもまた、「あらゆる仕事のなかで、針の次には、ペンが (The pen, next to the needle) 女性の資質に最もかなった仕事」だと常に語り、親しみと気品にあふれた手紙が、比類なく巧みな縫い物(細工もの)と共に彼女の女性としての卓越性を示す代表的な技能とされている<sup>三〇</sup>。儉約や家政の能力はもちろんこの「理想の女性」像に不可欠のものとされるが、リチャードソンがこれら二人の女主人公の「純潔」を針とペンによって、つまり針(物理的な手仕事)だけでは足りずにペン(精神的な手仕事)と結び付けて表象させようとしたことは、重要な意味を持っている。それは、娘の「純潔」の保持がもはや硬直した寓意表象のみによっては叶わず、孤独な環境で書く行為が要求する不<sup>レ</sup>断<sup>、</sup>の<sup>レ</sup>内<sup>、</sup>的<sup>、</sup>活<sup>、</sup>動<sup>、</sup>、不<sup>レ</sup>断<sup>、</sup>の<sup>レ</sup>内<sup>、</sup>省<sup>、</sup>(良心の自発的・主体的チェック)<sup>三二</sup>によって初めて完璧に実現されうるとする作家の認識を色濃く反映している。

注目すべきことに、リチャードソンは女性が手紙を「書く」ことと高い価値を置きながら、それと表裏一体の行為である「読む」ことにはほとんど言及していない。あらゆる女性の美德を兼ね備えたクラリッサの日常生活には聖書以外の「読書」は登場しないのである。「書くこと」と「読むこと」のこの不均衡の背後にはおそらく、既にヴァーヴェスに見られるような、物語や小説が娘

たちに及ぼす弊害(とくに色<sup>シ</sup>恋<sup>シ</sup>沙<sup>シ</sup>汰<sup>シ</sup>の危険)についての伝統的言説がある。このような言説は十八世紀のベストセラーであったルソーの書簡体小説『新エロイズ』(一七六一年)〈序〉にも顕著に見られ<sup>三三</sup>、この時代にはまだ広く支持されていた。従ってリチャードソンが「書く」行為に込めた意味も、ピューリタン精神の浸透とともにますます声高になっていく「純潔」モラルの文脈に沿ったある種の隠<sup>メ</sup>喩<sup>ク</sup>と理解すべきだろう。つまり、「純潔」をめぐる攻防において常に危険に曝されている娘たちにとって、「書くこと」は手仕事に集中することと同様に、いやそれよりも一層、自覚的で強固な防壁になりうる、と彼は考えたのである<sup>三四</sup>。

しかしながら、手仕事とペン、この並列と等価的同置は、古来手仕事に付加されてきたモラルや寓意の意味を必然的に多義化し曖昧にする結果をも招いたように見える。そして同時に、これらのモラルを手仕事と結び付けて推奨してきた男性自身が、内省的・心理主義的傾向を強めていくこの世紀の経過とともに、手仕事に携わる女性の動機や心裡を現実<sup>ニ</sup>に即してより精密に観察するようになっていく。こうして手仕事は生活のため、自体的楽しみや社交のためのみならず、さらには女らしさや婦徳の装<sup>イ</sup>い<sup>、</sup>のため等々と、心中深く踏み込んだ描写が近代小説の不可欠の要素として定着するのである。

(六) 手仕事の〈モラル〉と〈楽しみ〉

長く〈糸紡ぎ〉に託されてきた女性の一般的な勤労モラルは、十八世紀後半になると編み物（毛糸編み）によって表象されるようになる。縫い物と並んで編み物は装飾よりも実用に向くものであったから、暇を惜しんで家族に必要な物を編むことは〈従順〉の美德とビュリータンのな（時は金なり）の実践に最も適していた。十九世紀イギリス小説に描かれる手仕事は、『アダム・ビード』のポイザー夫人のように厳格に家庭を管理できる女性の、歩きながらも手離すことのない仕事ともなれば、『虚栄の市』のクロール卿夫人やオズバン嬢のように才能も意見も無く、かといって「馬鹿な女によくあるような心の頑固さ」<sup>三五</sup>も持ち合せない従順な妻やスピンスター<sup>三六</sup>にとつて、体裁の繕える手遊びともなり得ている。

ヨハン・ベックマンは一七八〇年から二十五年間かけて記した『西洋事物起源』で、編み物をする女性は「無駄に費やす時間の使い方」を知っていると称えた。編み物は「(…)会話を妨げず、気を散らせることもなく、空想にふけりながら仕事をすることもできる」からである<sup>三七</sup>。この発見の中で彼が強調したのは、どのような状況でも仕事は可能であるという勤勉モラルであったが、その一方で従来戒められてきた「おしゃべり」、「空想」が容認されていることは注目に値する<sup>三八</sup>。「賢明な編み手なら、自分

が見たり聞いたりしていると思われたくないことを、編み物をしながら見たり聞いたりできる」とも述べられ、手仕事でゴシップの場となり得ることさえも示唆している。中世以来「よく聞き、決して考えない」従順さを養うものとして女性に手仕事を課してきたのは男性だったが、ここでは同じく男性によって、「おしゃべり」や「空想」が手仕事に付き物であり、互いを妨げるものではないことが指摘され、認められているのである。

実際、編み物やパッチワークなどの単純な縫い物は、女性同士が集まって「おしゃべり」しながら行うのに都合のよい手仕事だった。『ミドルマーチ』では、醜聞を種に、頻繁にお茶の集まりを開いては、「主婦も、未亡人も、独身婦人も、手仕事を携えて」<sup>三九</sup>出かける様子が描かれるが、こういった集まりは十九世紀半ば頃には、手仕事と食べ物を持ち寄って楽しむソーイング・パーティーとして非常に盛んになり、女性同士の交際自体に主体が置かれるようになる。この背景には産業化による価値世界の男女二分化——資本主義的価値観に基づく男性の領域（世間<sup>フォー</sup>）と、キリスト教的価値観に基づく女性の領域（家庭<sup>ホーム</sup>）<sup>四〇</sup>——があった。女性たちは高潔を守るといふ宗教的使命を共通目標に掲げ、互いによい〈家庭〉作りを目指して連帯した。持ち運びできる簡易性を備えた手仕事は、集まって行うのに都合のよい家事の材料であった。ピーはたとえその内実がゴシップの場であっても、手仕事に結び付け

られたモラルと女性の領域の神聖視ゆえに世間に広く受け入れられ、女性たち自身にとってはモラル実践の満足感とおしゃべりの楽しみが同時に得られる場となつて流行していったと考えられる。

とはいへ、ビー、とりわけ新開地アメリカのキルティング・ビーは、おしゃべりの場だけでなく、女性同士の絆を深める貴重な場でもあつたことは確かである。キルティング・ビーでは婚礼の贈物や、開拓地へ移住していく二度と会えないかも知れない友への贈物が共同で縫い上げられた。キルトはそれぞれが持ち寄つた端切れをみんなで一針一針縫い合わせ、時にはそこに署名やメツセージを入れて作られる。布をつなぎ合わせることはまさに一人一人の思いをつなぎ合わせることであり、こうして作られたフレンドシップ・キルトは、新しい生活に踏み出した女性にとつては、実用の機能以上に故郷や仲間を思い出すための大切なものとなつた。

一方、ベックマンが「上品な生活を送る運命にあつた若い婦人の教養の一つ」と見なし、「他に自分の時間を使うこともない修道女や金持の婦人達が」<sup>四</sup>「携わるものとして」いるレース編みや刺繍は、この時期のイギリス中産層の娘たちにとつて一種のステータスシンボルとなりつつあつた。『虚栄の市』のアミーリヤは商人の娘ながら「恋人と睦まじく語り合つたり、モスリンの襟に刺

繍をしたりして日を暮している」<sup>四三</sup>。父母は娘を良家に嫁がせるために女塾へ通わせるが、そこで教えられるものは音楽、舞踏そして諸種の刺繍なのである。

どこの家の娘が誰と結婚するかということも手仕事の集まりでの恰好の話題となつたが、噂される娘たち自身にとつても結婚は最大の関心事で、「やりかけの刺繍を膝にのせて、ためらいがちなもの憂い様子で、じつとそれを見」<sup>四三</sup>ながら思うことは結婚相手のことであつた。十七世紀オランダ風俗画に描かれた若い娘たちの恋はより大胆になり、彼女たちが手仕事をしながら楽しむおしゃべりの相手には直接恋人が選ばれている。『フロス河の水車場』では刺繍するルーシーの傍らでゲスト商會の御曹司が銕を渡したり歌を歌つたりしながら語りかける。あるいは、訪ねて来た恋人と顔を合わせるのを恥じらい、目は手元の手仕事にやりながら、口はおしゃべりを続けている娘も描かれる。手仕事は恋人と二人きりで過ごしている事実を帳消しにする口実でもあるかのように取り出されるのである。かつては娘たちの純潔を保証するものと考えられた手仕事<sup>サポルト</sup>「炉辺のつとめ」<sup>四四</sup>がここでは恋を支えるものに成り代わつている。それは、勤労モラルに従う勤勉で慎ましい姿を装つて、女性に異性と語り合う楽しみをも提供したのである。

(七) 日本における西欧の手仕事の受容

西欧の手仕事は、日本に近代化の一環として導入されることになるが、それ以前から「衣」にまつわる手仕事は、日本においても女のたしなみとして重要視されてきた。「女大学」<sup>四五</sup>の系譜には女の手仕事の重要性が詳細に書かれている。一七一〇年に貝原益軒が著した「女子を教ゆる法」の第七条には、「婦功」とは「ぬい物をし、紡み、績<sup>つむ</sup>ぎをし、衣服をととのえ」ることとある。婦功は女功（女紅）とも表現され、女性の身につけるべき手わざのことを指す。衣服全般に関わる仕事を女のたしなみとして強調する教えは、一八三六年の柏原清右衛門、小川彦九郎編「女大宝箱」を経て、明治に入っても変わることなく受け継がれた。一八七四年の高田義甫著「女訓」第二十四条では「生物識りなる女は、縫針、養蚕、紡ぎ織り・割烹などのことを賤しき事のように云いながら、習わざるものあ」るが、「開けし国々の女」はみなこれを学んで嫁入りする、つまり手仕事は開化国の女性のたしなみなのだとして示唆している。日本的な婦徳が従来の説得力を失い始めた時代に、手仕事は西欧においても婦徳とされることを引き合いに出してそれを正当化し補強しようとするこの論法は、既に一種の欧化主義を示していた。この後「女大学」は「近世女大学」（一八七四年）、土居光華「文明論女大学」（一八七六年）に至るまで依然として手仕事を女性のたしなみとして強調しつつ、「西洋縫機器図」

（ミシン）を紹介するなど、随所で西洋について触れ始めるのである。

西欧の手仕事の技法は、明治四年にヘボンが横浜居留地で塾を開き語学及び編み物を教えたのを皮切りに、このヘボンの塾の子部から出発したキダーの塾（後のフェリス女学校）を始めとして、主にピューリタン系のキリスト教主義女学校で、英学とセツトにして教授された<sup>四六</sup>。宣教師達は英米の女学校に倣って王女会（King's Daughters' Society）<sup>四七</sup>と呼ばれる受洗者達の自治会を設置し、金曜日の夜に教師や女学生達が集まって、慈善事業の資金を得るための洋裁や編み物などの手仕事を行うことを教えた。十人を一組として各組ごとに毎週の成果を報告させたり、貧困者ための救済・教育機関である孤兒院や日曜学校の運営を王女会会員に任せて自負心を持たせたりするやり方によって、女学生は互いに連帯し競争しながら、寸暇を惜しんで手仕事に励む習慣を身に付けた。宣教師は西洋の手仕事を教える際、その合理性も説いた。時間を短縮できるミシン縫いや、こまめに取り替えて洗い衛生的に使用するためのリネン類や下着の製法を授けたのである。

従来の「女大学」においては、女性が紡み・績ぎ・縫い物をして自らの衣服をきれいに調えることは、身を固く慎むことを意味していた。また夫や舅姑に仕えて家を盛り立て存続させよとの教えは、女性が家族の衣服を調えるだけでなく、家計の一助とするた

めの手仕事を休みなく行わなければならぬことを意味していた。針供養や裁衣に吉日を選ぶ慣習にみるように、道具ばかりでなく裁縫という手仕事そのものが神聖視されてもいた。それほどに縫い物は女性が真剣に取り組むべき厳しい仕事と考えられたのである。西欧の手仕事に託された〈貞淑〉や〈勤勞〉のモラルが日本の女学生たちに容易に受け入れられたのは、このような土壌が存在したからだろう。その上、西洋風の信仰に基づく慈善活動や合理性など初めて出会うものへの好奇心と憧れも手伝って、彼女たちは手仕事によるキリスト教精神の実践に熱心に取り組んだ。

信仰を共にする娘たちが集まって行う手仕事は、日本の縫い物では体験し得なかった〈楽しみ〉を伴っていた。それは後になって、「晴れやかな心持で、先生方も、小さい生徒も、全く一つ心になり切って働く、この夕べの楽しい仕事会！」<sup>四八</sup>「静かな談笑裡に、或はハンカチーフ人形の衣服編み物等、それぞれに忙しく手を働かせつつ楽しい時間を過ごした」<sup>四九</sup>などと回想されている。しかし、女学生たちの心は次第にモラルよりもその実践方法そのものに惹きつけられていったように見える。初期の女学生に土族出身の娘たちが多かったことも、手仕事の集まりの魅力を増加させただろう。十二三歳になった武家の娘たちが師匠の元でそれをそれまでの裁縫の稽古では、複数で集まってもおしゃべりの楽しみは与

えられていなかった。「女大学」は多言を戒めていたから、「一日ろくに口もきかずにせつせと針を動か」<sup>五〇</sup>。すことが求められたのである。明治二十六年フェリス女学校に入学して王女会で奉仕活動に打ち込み、暇さえあれば編み棒を持った相馬黒光も、手仕事の場の楽しみに強く惹かれた娘たちの一人だった<sup>五一</sup>。安息日に仕事することを咎められてキリスト教への興味を失っていく黒光の例に見るように、宗教的モラルを支えるものとして導入された西洋風の手仕事は、時に宣教師の意図に反して宗教からの離叛をもたらすことにもなった<sup>五二</sup>。

勿論、日本の縫い物にも全く〈楽しみ〉がなかったわけではない。明治二十年代、女性の姿を細やかに描いた樋口一葉の作品には、〈縫い物をする女〉がしばしば登場する。『経づくゑ』のお園や『別れ霜』のお高など若い娘達が針仕事に身を入れる理由は、思慕する男性の良き妻になりたいという主體的な決意にある。一葉自身は、「針仕事にても学ばせ」んとする母の意見によって「死ぬ<sup>ばかり</sup>斗」<sup>五三</sup>悲しい思いで学校を諦め<sup>五三</sup>、その後は生計のための仕立て内職が手放せなかった。彼女にとって「針とペン」の幸福な両立はありえず、「ペン」に専念できない生活に苦しんだが、日記に律儀に記される「裁縫をなす」「衣縫う」などの文字からは、多くの時間を割いた手仕事が一葉にとって嫌悪ばかりでない、ある種の諦めと愛着が入り交じるものとなっていた様子が窺える。一葉は

日記で度々、思いを寄せていた師、桃水の服装に触れている。古びた二子の衿、美事な羽織袴、そして洋装の時もある。一葉は自ら作品に書いた娘たちのように、思慕する男性の衣服を仕立てる生活を夢想しながら針を運んでいたのではないだろうか。「婦女のふむべき道ふまはやとねがへど、そも成難く、さはとて、をの子のおこなふ道、まして、伺ひしるべきにしもあらずかし。」<sup>五四</sup>との葛藤には、自分にもあるいは夫のために衣を調える人生があったかもしれないという一葉の心が現れている。縫い物は独りで秘めた恋と向き合う楽しみを伴っていった。このように、開化の時代に「ペン」で立つことを志した一葉は、生活の必要が強い「針」(縫い物)の伝統的な観念連合の枠内でテクストを紡いでいるが、同じ時代に女学校に通い西洋風の手仕事を習い覚えた娘たちは、後に次第に宗教的モラルを脱色しつつ、遠い異国への憧憬を募らせていったのである。

### (八) 「編て飾らん」

日本の女性たちの目は、西欧の手仕事が生み出す細工物の美しさへも向けられた。宣教師たちも「高貴な」婦人たちが細工物を習いたがることに着目し、布教の一手段として、聖書を読む時間を設けると引き換えにこれを受けた<sup>五五</sup>。西欧の手仕事は今やキリスト教と結びついて女学生以外にも広まっていた。

明治十九年十月、日本人キリスト者有志の集まりを母体とする「婦人あみもの会」が発会する<sup>五六</sup>。会主は東京婦人矯風会を始めキリスト教に関わる様々な社会運動を行ってきた佐々城豊寿である。発会式は作品の展示、唱歌、風琴などで盛り上がった様子が新聞に報じられているが、同会で歌われた豊寿の選による「紅網会の歌」の内容は非常に興味深い。

(一) 友の交り厚うせよ

編めよ羊の毛より糸、座敷の飾り身の飾り、あみあやまり、とぎなおせ編過は解改、永く結ばん愛の友。

(二) 国の文明を飾れ

経に紅、緯緑、柳も花も打混て、都の天を綾錦、編て飾らん糸の友。

(三) 智識を詰めよ

見や心の靈動を、唯一線の糸なれど、綾取る数ぞ限りなし、学べ励めよ文の友。<sup>五七</sup>

ここには、手仕事を通した「友の交わり」や、編み物と英学をセットで教えて女子の「智識」向上を図った宣教師たちの精神など、近代日本に導入された西欧風手仕事の特徴が端的に現れているが、とりわけ注目に値するのは「座敷の飾り身の飾り」、「文明を飾れ」、「編て飾らん糸の友」など「飾ること」への躊躇のない肯定である。質素堅実をモットーとするプロテスタンティズムに

「身の飾り」という考え方はない。女学校で教えられた手芸や知識も文明を「飾る」ためのものではあり得なかった。しかし歌では、編み物が「座敷」と「身」を、そして「都の天」を飾るものとして推奨されている。西欧から伝わった編み物がここで信仰の文脈を離れ、西欧の香りを伝える華やかな装飾品として、また女性たちが絆を深める手段として、日本の女性たちに受容されている様子が見て取れる。

明治二十年に刊行された編み物の指導書『毛糸編み物独案内』でも、編み物は「優美清潔なる好手芸」<sup>五八</sup>として奨励された。同じ頃、小説にも〈編み物をする女〉が登場している。この時期に書かれた女学生が登場する小説はまだ「日本的女性」の勝利、欧化主義の女性」の敗北という図式の枠を出ないものであるが、そのひとつ、三宅花圃『藪の鶯』<sup>五九</sup>で「日本的女性」秀子に与えられる唯一の近代的要求が編み物であった。饗庭篁村『窓の月』<sup>六〇</sup>では、幼馴染みを慕って裁縫の稽古に精を出す娘と、伴侶としてはできれば「縫取編み物」の嗜みがあればよいと考える学校出の男性が描かれる。さらに『他山の石』<sup>六一</sup>には、思慕する男性の母親に手袋を編んで贈る娘が描かれる。しかし、ここに登場する西欧風手仕事を身に付けた娘たちが同時に和歌や漢学など伝統的な教養を持つか、あるいはそれらを学ばなかったことを後悔していることから分かるように、エリート男性に相応しいとされる女

性の持つべき資質が西欧風のものに取って代わったわけではなかった。編み物はあくまで舶来の添え物的「嫁入り道具」、「身の飾り」であり、西欧では刺繍やレース編みがそうであったように、日本における一種のステータスシンボルであったと言える。

西欧風手仕事がモラルから乖離していく過程には、同時代のフランス文化の流入が深く関わっていたように見える。鹿鳴館の貴婦人たちの洋装は、言うまでもなくパッスルスタイルドレスやリボン付き帽子のパリモードだったが、『女学雑誌』の記事には「中等以上の婦人中女の洋服地に用ふる仏国製の織物を帯地とする」と流行し夫が為越後屋白木屋等にては上等の服地に充つる為め仕入れたる織物も十中八九は皆帯地に売れ殆んど品切となる程なれば何れも仏国へ品物の注文をなす由」<sup>六二</sup>とあり、和服の素材にまでもフランス製が好まれたことが分かる。開化日本の女性たちの「身の飾り」はキリスト教と無縁のところでも西洋風をめざして進行しつつあり、ここではフランス風俗が中心だった。

フランスはヨーロッパの洗練された〈よき趣味〉を先導する国であり、フランス語に通じていることは教養の条件ともされたが、それは華やかな〈虚飾〉の文化につながるものでもあった。『米欧覧実記』にはウィーンの万国博覧会見物の記が含まれているが、フランスの展示物については、「婦人ノ帽ニ飾ル剪綵花ニハ、金銀珠玉ヲ鑲鏤シ、華然爛然トシテ」、「凡ソ仏国の物品ハ、英国

トハ其趣キ異ナリ」「仏ハ工ヲ買フヘシ、価廉ニシテ顔貌甚々潤華ナリ」<sup>六三</sup>と記されている。使節団が、英国と異なり〈実〉<sup>じつ</sup>よりも〈美しさ〉に長けると見なしたフランスの手工芸のうち、剪綴花（造花）は実用を離れた細工の最たるものだったが、この技術は西欧化を先頭に立って進めた女子師範学校やフランスのカトリック系女学校<sup>六四</sup>、職業女学校のほか、女学会などの集まりで盛んに教授され、またたくまに若い女性たちの間に広まった。つまり、日本の娘たちの手仕事教育にキリスト教モラルを付した米國を主とするプロテスタント系女学校とは別系統で、「身の飾り」のみを目的とする〈虚飾〉の手仕事の流れ込んだのである。十七世紀にフランスで発展した同じく装飾用のレースも、東京にレース教場ができてから一定の生徒数を獲得し、その女生徒および女教師が皇后の衣服の縁飾を作成する栄誉も担った。〈虚飾〉のアンチテーゼとして十六・七世紀北ヨーロッパで〈貞潔〉〈純潔〉の寓意となった手仕事は、〈勤勞〉〈質実〉のモラルとともに明治日本に導入されたが、ここでは次第に西洋風の魅力に富んだ手芸として学ばれるようになり、〈虚飾〉を駆り立てる要因ともなった。

## 結び

福沢諭吉は明治二十五年十一月の『時事新報』で、「古來我國の女流に最も重んずる所」であった「裁縫の一事」を蔑ろにする

近來の教育法の「一方に偏りたる弊害」を嘆いている。彼はここで、「女子の爲めに謀りて裁縫の事を後にするは教育の緩急輕重を誤るのみならず、文明の本意に背くもの」であり、「一家の婦人が衣服の事を主宰」することが「家人和合の幸福」をもたらすと説いた<sup>六五</sup>。主婦の「裁縫」は、家族構成員相互の対等の關係を重視する「家人和合」の理想にも大きく寄与するものと考えられたのである。こうして一時期「生意氣」女学生によって忌避された日本的な手仕事（「裁縫」）は、欧化政策の揺り戻しの始まる頃から近代「文明」思想によっても強力に支持されて女学校の正式科目となっていく。「女大学」の頃から〈家〉をまもる婦徳を象徴した伝統的な針仕事は、近代化した「家人和合」の〈家庭〉モラルにも接ぎ木されて戦後まで生き残った。その一方で、ハンカチやリボンなど西洋風手仕事が生み出した装飾品は、美しい商品としても若い娘たちの心を捉えていった。「ハンケチで咽喉を緊めた『浮雲』のお勢（明治十八年）に始まり、「夜会結に淡紫のリボン飾」をした『金色夜叉』の宮（明治三十年）、「デートン色の自転車に海老茶の袴、髪は結流しにして、白リボン清く、着物は矢絰」で登場する『魔風恋風』の初野（明治三十六年）、そして男性に贈られた「蟬の羽根のようなりボン」を結び、吾妻コートの袂にヘリオトロップの香水をしみ込ませた絹のハンカチを入れる『三四郎』の美禰子（明治四十二年）へと受け継がれていく。

彼女たちの身に着ける西洋風の細工物は、近代教育を受ける女生の象徴として世間の注目の的となっただけでなく、ともすれば「墮落女学生」のイメージとも結び付けられるようになるのである。

注

- 一 ヘシオドス『神統記』（廣川洋一訳、岩波文庫、一九八四年）九〇四～九〇六行。
- 二 カール・ケレーニイ『ギリシアの神話―神々の時代』（高橋英夫訳、中央公論社、一九七四年、四五～四六頁参照。また、cf. *Der Kleine Pauly, Lexikon der Antike in 5 Bänden, article: Moira*. 複数の女神たちについては『オデュッセイアー』（呉茂一訳、岩波文庫、一九八八年）第七書、一九六～九八行。
- 三 カール・ケレーニイ『ギリシアの神話―英雄の時代』（高橋英夫訳、中央公論社、一九七四年）九四頁参照。あるいはアウトリユコスがシシュポスを見込んで与えたとも言われる。因みに、オデュッセウスの父親として一般に知られるラーエルテースは、アンティクレイアがシシュポスの胤を宿した後、彼女に求婚したとされる。
- 四 前掲書、二五四～五五頁参照。
- 五 『オデュッセイアー』、第一書、二五六～二五八行、傍点筆者。
- 六 古代ギリシア社会では、演説（雄弁）だけでなく武勳を挙げるためにも知恵が不可欠と考えられた。
- 七 アポロドーロス『ギリシア神話』（高津春繁訳、岩波文庫、一九八五年、第三卷一四・八）の素っ気ない記述にも、オウイディウス『変身物語』

（中村善也訳、巻六）の生々しく脚色された記述にも、同様のモチーフが登場している。

- 八 アテナイの政治家ペリクレスは、戦死した市民たちの葬送演説で、市民女性の振舞い方について簡潔にこう述べている。「婦徳について私から言うべきことはただ一つ、……女たるの本性に悖らぬことが最大のほまれ、褒貶いずれの噂をも男の口にされぬことを己の誇りとするがよい。」（トウキユイデース『戦史』久保正彰訳、岩波文庫、一九七七年、巻二、四五）

- 九 初期のローマ人が実際に花嫁を戦争の掠奪品としていたことについては、E・イエシュタード『ローマ都市の起源』（浅香正訳、みすず書房、一九八三年）八二頁及びF・d・クーランジュ『古代都市』（田辺貞之助訳、白水社、一九六一年）四三二頁以下を参照。

- 一〇 『アルターク英雄伝（一）』（河野与一訳、岩波文庫、一九五二年）（ロームルス）一九。リーウイウスもサビーニー女たちについて語っている。糸紡ぎには言及していないが、やはり夫婦の強固な絆を重視する言説が見える。『ローマ建国史（上）』（鈴木一州訳、岩波文庫、二〇〇七年）第一巻、九、一二を参照。

- 一一 ウェルギリウス『アイネイアース』にも、この農民的イデオロギーを示す箇所が少なくない。少なくとも共和制ローマの時代には、家政を采配する家父長としての男性の任務が、例えばカトーの典型的なエピソードに見られるように、無骨な農民の心性とともに強調されている。

- 一二 広場での公的讃辞に関しては、歴史時代に入ってからのかミルルス（前四世紀のローマの将軍）の章（八）参照。ローマでは母・妻として立派な女性が亡くなったとき、男性の場合と同様にその肖像を

- 掲げて広場に示して歩く習慣もあった。ローマ女性の美德に関しては、同じプルタルコス次の著作も参照。Plutarch, *Bravery of Women*, in *Plutarch's Moralia III* (Loeb Classical Library), p.475.
- 一三 *Les quatre âges de l'homme: traité moral de Philippe de Navarre*, ed. Marcel de Freville, 1888 (reprint 1968). 十三世紀前半は過剰のフランス語資料。
- 一四 cf. Konrad Bichins Pädagogik [402], S.185-189, in *Frauen im Mittelalter*, Bd.2, Annette Kuhn (Hrsg.), 1984, S.246-9; 十五世紀前半のドイツの聖職者による資料。
- 一五 Zink, Michel, *Belle: Essai sur les chansons de toile, suivi d'une édition et d'une traduction*, 1978.
- 一六 フランチェスコ・デル・コッサのフレスコ(フェララ、スキファノイア宮、一四七〇年頃)には、復活した異教神ミネルヴァ(アテーナー)の支配する三月の図像として、知恵と手芸を司るこの女神にふさわしく、若い貴婦人たちが刺繍、機織り、縫い物、糸紡ぎをする姿が描かれている。おそらくはその知恵を必要としない単純さゆえに、糸紡ぎは他の手仕事に比して目立たず、脇の方の後ろ向きの女性が担当している。
- 一七 集団での糸紡ぎは、本来夜長の時期の暖房代と蠟燭代を節約するための方策だったようだが、農村部では共同体の若者たちも出入りする一種の社交場でもあった。
- 一八 十六世紀のこのような言説の典型例としては、ヴィーヴェスが挙げられる。「羊毛と麻にかかわる仕事は(……)質素な生活に寄与し、それは女たちが第一に心がけるべきものである。どんな女も、王女であれ王妃であれ、この手仕事の技術に無知であってはならないとわた
- しは思う。女たちが手仕事や家事から自由になったら、もっとましなことなど何もなしえない。」これに続けてヴィーヴェスは暇な女たちの際限のないおしゃべりと邪悪な想念に辛辣な罵言を呈している (cf. J.L. Vives, *De Institutione Feminae Christianae, Selectid Works of J.L. Vives*, Vol. VI, 1524, revised 1538/1996-8, p.18-19)。
- 一九 ヤコブス・デ・ウオラギネ『黄金伝説』(前田敬・山中知子訳、人文書院、一九八七年)第四卷、一六二(聖エリザベト)を参照。
- 二〇 中世末からヨーロッパの図像世界を席捲し始める髑髏については、前野みち子「書物と髑髏」、『名古屋大学附属図書館研究年報』第五号、二〇〇六年、八三〜九六頁、参照。
- 二一 夫を思つて涙を流すルクレティアの描写はオウィディウスを特徴づけているもので、先行するリーウィウスには夜更けまで「夜業の女奴隷に交つて羊毛の仕事にいそしむ」とだけ書かれている。糸紡ぎの場の家庭的雰囲気についてはローマ文学に伝統がある。cf. A.G. Lee, *Ovid's 'Lucretia': Greece & Rome*, Vol.22, No.66, (Oct., 1953), pp.107-118, esp. p.110. テクストはオウィディウス『祭暦』(高橋宏幸訳、国文社、一九九四年)第二巻、七四一〜七五八行、及びリーウィウス、前掲書、第一巻五七、参照。因みに、貞節なルクレティアの自害は暴君打倒のために市民が蜂起するきっかけとなっており、ここにもローマ史における女性の役割が顕著に現れている。
- 二二 マールテン・ファン・ヘイムスケルク、アムステルダム国立博物館蔵。
- 二三 Roemer Vischer, *Sinnepoppen*, 1614 (Harvard University Library, microfilm), XXXVIII. 著者は十七世紀初頭に活躍した詩人・モラリスト(一五四七〜一六二〇)。同時代の著名な文人たちとの幅広い交友関係

によっても知られる。

二四 中産層の場合、若い娘たちに手芸が積極的に勧められたのは、そこに託された伝統的なモラルのためばかりでなく、見栄えのする家族の服飾を調えるというより現実的な要請を踏まえてもいた。cf. Shimizu, Stacey. *The Pattern of Perfect Womanhood, in Women's Education in Early Modern Europe: A History, 1500-1800*, ed. by Whitehead, Barbara J., 1999, pp.75-100.

二五 cf. Franits, Wayne E., *Paragons of Virtue: Women and Domesticity in Seventeenth-Century Dutch Art*, 1993, p.21-32.

二六 オランダでは両親が外からの誘惑に対して娘を守るだけでなく、一定の年齢に達した娘たちが自覚的・自発的に自分の身を守るような女子教育が積極的に目指されている。前野みち子『恋愛結婚の成立―近世ヨーロッパの女性観の変容―』名古屋大学出版会、二〇〇六年、二八三―八四頁、参照。

二七 この集中の中断のトポスについてはcf. Franits, *ibid.*, p.47-52.

二八 ダニエル・デフォー『モル・フランゲーズ』（伊沢龍雄訳、岩波文庫、一九六八年）二五―二六頁、参照。彼女は「この市の主な産業の毛糸の紡ぎ方」も習っているが、一日の賃仕事としては「糸紡ぎなら三ペンス、普通の針仕事なら四ペンス」（二〇頁）とあるように、針仕事の方が有利だった。

二九 Samuel Richardson, *Pamela*, 1741/ 1988 (penguin classics), Letter 29.

三〇 Samuel Richardson, *Clarissa*, 1747-48 / 1985 (penguin classics), Letter 529. cf. Letter 131 (the needle, the pen...). 二つとも原則的には針の方がペンより優先されている。

三一 この二人の女主人公はともに監禁状態に追い込まれ、彼女たちの

手紙は次第にモノログ化していく。とくにクラリッサの場合はこの度合いが極端に強まり、手紙は結末に向かって次第に自己省察の覚悟になっていく。その一方で、リチャードソンは読者にルクレティアの凌辱を想起させつつ、凌辱されたクラリッサの内心の葛藤を近代的良心の問題に移し替えて描いている。ルクレティアへの直接的言及は凌辱した放蕩貴族ラヴレイスとその友人ベルフォードの手紙のやりとりに見られる。cf. *Clarissa*, Letter 222, 263, 371. また言及はないが暗示されているのは、Letter 246.

三二 ルソーは〈序〉で、この小説は既婚女性には有益であるが、「純潔な娘はけっして小説などは読まないものだ」と述べている。ルソー『新エロイズ』〈序〉（ルソー全集）第九巻、松本勤訳、白水社、一九七九年、一四頁。

三三 クラリッサは薬物を飲まされて純潔を失うが、それ以降の自己省察の深化と緩慢な死の選択が最終的に彼女に聖性をもたらすことになっっている。

三四 G・エリオット『アダム・ビード』（阿波保喬訳、開文社、一九七九年）七八頁。〈ジョージ・エリオット〉は一八五六年から文筆活動を始めた英国の女性小説家メアリー・アン・エヴァンズの筆名。彼女が男性名を使用したことは、女性には「読む」ことさえ許されていなかった小説を「書く」ことが社会的なタブーを意味したことを示している。「ペン」は十八世紀には手紙を書く道具として、「針」と共に純潔を表した。しかし女性が従順に自分の行為を反省する手紙以外のものを書きたいと願うようになり、「針」（女性のたしなみ）と「ペン」（知識への欲求）は拮抗するものとなっていく。

三五 ウィリアム・サッカレ『虚栄の市』（『世界文学全集七』三宅幾三郎訳、

- 河出書房新社、一九五七年）五八頁、三〇二頁。
- 三六 英語で未婚の女性を意味する「スピンスター」(spinster)が「糸を紡ぐ」(spin)を語源とすることからもわかるように、手仕事は家族を手助けする未婚の女性にとって重要な仕事であった。
- 三七 ヨハン・ベックマン『西洋事物起源Ⅱ』(二七八〇～一八〇五)(特許庁内技術史研究会訳、ダイヤモンド社、一九八一年)「網と靴下の編み物、靴下編機」。
- 三八 ベックマンは、帽子、長手袋、レースなど様々な編み物の中でも、実用性に勝る靴下だけを賛美することによって、勤労モラルを強調している。にもかかわらず、編み物に(おしゃべり)の楽しみを容認したのは、女性の「心を傷つける」恋愛小説の類から、遠ざけようとしたからとも言える。
- 三九 ジョージ・エリオット『ミドルマーチⅡ』(ジョージ・エリオット著作集五)工藤好美・淀川郁子訳、文泉堂出版、一九九四年)三二二頁。
- 四〇 Nancy F. Cott, *The Bonds of Womanhood*, Yale University Press, 1977, p.163, 167.
- 四一 『西洋事物起源Ⅱ』、「レース」六三二頁。
- 四二 『虚栄の市』一一〇頁。
- 四三 ジョージ・エリオット『ミドルマーチⅠ』(ジョージ・エリオット著作集四)工藤好美・淀川郁子訳、文泉堂出版、一九九四年)一一三頁。
- 四四 ジョージ・エリオット『フロス河畔の水車場』(工藤好美・淀川郁子共訳、河出書房新社、一九五〇年)二六七頁。
- 四五 以下、「女大学」は石川松太郎編『女大学集』(平凡社、一九七七年)を使用。
- 四六 他に、女紅場と呼ばれる手工芸を教える学校でも英語とセットにして教えられた。
- 四七 宣教師設立のキリスト教主義女学校において、「神を王として奉戴し、会員は皆王の女であって、常に敬神奉仕の精神を以て、自分の信仰の向上を計り、未信者を導く」(エフ・ジー・ハミルトン編『東洋英和女学校五十年史』(東洋英和女学校、一九三四年)一五三頁)という精神から名づけられた受洗者達の自治会。
- 四八 『東洋英和女学校五十年史』一六四頁。
- 四九 前掲書一五五頁。
- 五〇 山川菊栄『武家の女性』(岩波文庫、一九八三年)四四頁。町屋の娘が交じっていると芝居の声色や寄席の物真似で笑わせることがあったようである。また村落では「娘宿」の制度があり、娘たちが集まって話をしながら糸紡ぎや機織り、裁縫を行う習慣もあった。
- 五一 相馬黒光『黙移』(法政大学出版局、一九七七年)二七頁。
- 五二 キリスト教主義女学校の女学生は西欧の手仕事にまつわるモラル以外の様々な意味を、イギリス小説からも学んでいた可能性が、彼女たちは原則として新聞や小説を読むことを禁止されていたが、実際には前章で取り上げたサッカー、ジョージ・エリオットなどに触れていた。『女学雑誌』には女性文筆家の読書についての記事(二〇五号(一八九〇・三・二二)～二〇九号(一八九〇・四・一九))があり、女学生に勧める西洋の読み物などが載せられている。また『女学雑誌』に掲載された小説に登場する女学生の読書傾向からも、実際の状況を推し量ることができる。
- 五三 樋口一葉『塵の中』明治二十六年八月十日(北村透谷・樋口一葉集)(筑摩書房、一九七九年)三三五頁。
- 五四 樋口一葉『蓬生日記』明治二十四年九月廿二日(北村透谷・樋

- 口一葉集』(筑摩書房、一九七九年)二八五頁)。
- 五五 「ミス・カーメトルの手紙」(一八八五)、『敬和会No.四六』東洋英和女学院所蔵、一九八七・四)一三三頁。
- 五六 新報「婦人あみもの会」『女学雑誌』三七号(一八八六・一〇・五)。
- 五七 「発会式、作品陳列会盛會」(『毎日附録』一八八六・九・二六)、『明治ニュース事典 第三卷 明治一六年〜二〇年』(毎日コミュニケーションセンター、一九八四年)。
- 五八 浜田兼二郎編集『毛糸編み物独案内』(魁真楼、一八八八年)(国立国会図書館、近代デジタルライブラリー <http://kindai.ndl.go.jp/BIBDetail.php> を使用)。
- 五九 三宅花圃『藪の鶯』(『明治小説集 現代日本文学全集八四』(筑摩書房、一九五七年)所収)三九頁。
- 六〇 饗庭篁村「窓の月」『小説むら竹』第一集(春陽堂、一八九二年)一〇三〜一〇四頁。
- 六一 饗庭篁村「他山の石」(第三回)『小説むら竹』第一集(春陽堂、一八九一年)八六頁。
- 六二 『女学雑誌』八二号(一八八七・一〇・二九)。
- 六三 久米邦武編、田中彰校注『米欧回覧実記』四(岩波文庫、一九八〇年)三二〜三三頁。
- 六四 この時期は仏語女学校(明治二〇)、女子仏学校(明治二二)が見られる程度で、フランスのカトリック系女学校が増えるのは明治三〇年後半からである。
- 六五 「女子教育」『時事新報』明治二十五年十一月十日、『福澤諭吉全集』第十三卷所収。五六四〜五六六頁。